

近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立 と展開

高山, 百合

<https://hdl.handle.net/2324/2534518>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

(様式3)

氏 名 : 高山 百合

論 文 名 : 近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立と展開

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立と展開について論じるものである。ここでいうところの「官展アカデミズム」とは、明治40年(1907)に文部省美術展覧会(文展)が設立されて以降、帝展、新文展、日展と様々に形を変えながら100年以上にわたって日本の美術界を支えてきたものであるが、とりわけ1960年代から70年代における日本の近代美術史研究においては、しばしば負の評価を下されるものであった。そのため、当時においては主流派であったはずの官展系の画家や作品の研究はほとんど行われることなく、多くの画家たちは忘却の彼方に追いやられている。その一方で、大正時代の美術といえば、「大正アヴァンギャルド」と呼ばれる、大正生命主義の影響を顕著に受けた前衛的な作風を示す芸術家たちの活動が注目されてきた。このような「大正アヴァンギャルド」の研究は、長きにわたって大正期の美術研究における中心的な課題であり、なおかつ、そのようなアヴァンギャルドの画家にとって、「官展アカデミズム」は乗り越えられるべき旧弊的で堅牢な存在であったと位置づけられてきた。このような研究史のうえでの評価と位置づけによって、近代日本美術の枠組みと方向性が決定づけられてしまったことで、本稿で詳しく論じている、岡田三郎助や中澤弘光、中村研一などをはじめとする官展系の作家たちは、日本近代美術史研究から長らく等閑視されてきたきらいがある。

さらに言えば、このような日本近代美術史の語りにおける偏重は、19世紀のフランス近代美術史研究の縮図であった。しかし、フランス近代美術史研究においても、ニューアートヒストリーの流れのなかで、前衛偏重という従来の美術史研究に対する見直しの機運が高まり、1960年代後半以降はアカデミズムの研究が盛んに行われている。そして、そのような動向と全く平行ではないものの、日本の官展や官展系の画家たちもまた注目される状況にはなりつつある。実際1980年代後半以降は、官展にクローズアップするいくつかの重要な展覧会が開催されている。さらに近年では、官展系作家の画業の全貌に迫る個展が、各地の公立美術館において開催されている状況である。さらには、植民地における官設美術展の研究が進んでいること

にも着目すべきである。植民地の官展の基盤となるシステムであったのは、当然のことながら日本の官展であり、官展系の美術家たちは、植民地官展のみならず、植民地における公的な壁画の制作などを含めて、植民地における文化政策に積極的に関わったのである。

このように日本近代美術史における官展という制度の意味や存在理由が見直されている昨今ではあるものの、官展系作家や作品についてはいまだ研究すべき多くの余地と課題が残されている。

したがって本稿では、日本における「官展アカデミズム」の成立と展開を、とくに大正時代～昭和戦前期を中心として連続的にたどりながら、「官展アカデミズム」の成立以降の展開を考えるうえで特に重要と思われる作家と作品を個別に検討することを通して、その意義を明らかにすることをひとつの大きな目的とする。

具体的には、第1部においては、「官展アカデミズム」の成立と展開、ならびに評価史について、同時代に展開された具体的な議論を踏まえつつ論じる。「官展アカデミズム」の歴史を振り返れば、官展の外部はもとより、内部からも、官展の存在意義や制度について幾度となく議論が重ねられてきた。その議論を丹念にたどっていくことで、官展系の作家たちが近代の時代の流れのその時々で抱えていた作画上の理念などをあぶりだしていくことができる。また、言うまでもなく官展アカデミズムの成立と展開、あるいは権威化に不可欠であったのは東京美術学校におけるアカデミックな教育制度であるが、東京美術学校の教育制度をさらに強化するものとして存在していた私塾である、岡田三郎助主宰の本郷絵画研究所と、その研究所の所員によって開催された春台美術展にも着目して論じる。さらに、第2部の前半では、官展系作家が官展に出品した実際の作品を取り上げ、その個別の作品研究を詳細に行う。「官展アカデミズム」の成立という意味で大きな役割を果たしたのは黒田清輝であるが、それ以後の展開や動向について、岡田三郎助、中澤弘光、中村研一といういずれも九州出身の洋画家の画業と作品に即して探ることで、彼らが、その画業や作品を通して、「官展アカデミズム」を盛り立てるために成し遂げようとしたことを明らかにするものである。具体的には岡田三郎助《水浴の前》(大正5年、第10回文展)、中澤弘光《かきつばた》(大正7年、第12回文展)、中村研一《瀬戸内海》(昭和10年、第二部会展)という、大正期から昭和期にかけての官展に出品されたなかで、とりわけ問題作となった作品を取り上げて論じる。具体的な分析と解釈もさながら、この3作品に共通するのは、官展系作家たちの共通する作画理念であった「理想画」の問題についてである。「理想画」とは、当時の批評用語で、おおむね写実や写生を越えて、想像力や空想力によって構想された歴史画や神話画や寓意画や象徴主義的な作品群を総称するものであったが、この問題について検討を加えることは「官展アカデミズム」の問題を考えるうえで不可欠なものであるだろう。

最後に、第2部の後半では、中村研一と田崎廣助という二人の洋画家を取り上げ、彼らの戦

前と戦後の美術表現における断絶と連続性について考察する。この視点は、近年の論考や展覧会に見られる重要なものであり、本稿もそれらの先行研究を踏まえたものである。さらにこの視点の導入により、「官展アカデミズム」の変容や一貫性について、戦前のみならず戦後にも敷衍しながら論じることができるだろう。

以上のように、戦後の美術史研究において等閑視されてきたきらいがある「官展アカデミズム」の再評価を、具体的な作品や作家を通じて行うことが、本博士論文の大きな目的である。